

「赦しのめぐみ」

マタイの福音書 18 章 21 節～35 節

導入

みなさんおはようございます。そろそろ夏休みが欲しい山岡です。社会人の時の短い夏休みから、神学生時代の長い夏休みをへて、再び社会に戻った身としては、日本の社会人の夏休み、平均4.4日は言葉を選ばずに言えば短いというのが本音です。

しかし、冬休みもあることを考えれば、1年に2度このような休みがあるだけでも幸せなことなのかもしれません。なぜなら、旧約聖書に記されているお休みの時は、もっと長期的な期間をかけてやっと迎えるものだったからです。

聖書にはレビ記 25 章に、神様がイスラエルに命じた、安息年という7年に1回の大きな休息の時間が記されています。しかし、この命令は、人への休みではなく、土地を休ませるためのものでした。

それはこの命令が、土地は神様のものであるということ、イスラエルの民はその神様の土地をお借りして、土地を耕させてもらっている寄留者に過ぎないということを、教えるためのものだったからです。

また、それ以外にも、安息年の前の年には土地の収穫が3倍になる、つまり土地を耕さなくても神様が養って下さるということを通して、神様への信頼を体験的に知ること、これもこの安息年の目的でありました。

そして、この7年ごとの安息年が7回繰り返された、次の年すなわち50年目には「宥めの日」と呼ばれる、大祭司によるすべてのイスラエルの民たちの罪の贖いがなされた後に、角笛による合図の音と共に、「ヨベルの年」と呼ばれる、土地も奴隷も、神様のものすべてが、自由を取り戻す恵みの年がありました。

しかし、この50年に1度のヨベルの年どころか、実際には7年に1度の安息年ですら、イスラエルの歴史の中では、ないがしろにされてきたようです。ですから、旧約聖書の時代にヨベルの年は一度もこの地上で実現しなかったのではないかと考えられています。人間が神様の土地、神様のものを盗みむさぼってきたこと、人間の神様に対する罪が、神の恵みの年である自由と開放のヨベルの年の実現を妨げてきたわけです。

しかし、新約聖書の時代に、イエス様が近づいたと言われた、天の御国においてはそうではありません。この天の御国には、すべての人に自由を与えるヨベルの年がもうすでに来ているのです。つまり、ヨベルの年はもうすでに私たちのただ中に来ているのです。そのことが今日の聖書箇所を読むと良く分かってきます。今日はここから「赦し」ということについて、共に考えてまいりたいと思います。それでは 21 節から見てまいりましょう。

21 節～22 節

21 節「そのとき、ペテロがみもとにきて言った。『主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何回赦すべきでしょうか。七回まででしょうか。』」

そのときとあるように、このとき 18 章では一貫して「天の御国ではどのように生きるべきか」ということが語られていました。幼子のようにへりくだる者が天の御国で一番偉いこと。(1～5 節) イエス様を信じる小さい者がつまずくことがないように大切にすること。(6～14 節) そして、自分に対して罪を犯した兄弟がいたなら、その兄弟の罪の赦しと回復に力を注ぐこと。(15～20 節)

このように、天の御国、すなわち信仰共同体である神の家族の中にいる、自分の兄弟、また姉妹が、自分に対して罪を犯した場合どうしたらよいのかということが語られているときに、ペテロがイエス様の近くに来て、こう言ったのです。「イエス様、兄弟が私に罪を犯したら何回まで赦したらいいですか、七回までですか。」ペテロは兄弟を一度赦した後に、また兄弟が自分に対して罪を犯すということがあった時に、どうしたらよいのかと考えたのでしょう。

当時のイスラエルでは兄弟の過ちを 3 回赦せば、まあ十分だろうとされていたようです。なので、ペテロはそれすらも上回る 7 回赦せば、これならイエス様も納得してくれると思ったのかもしれません。このペテロの質問に対してイエス様はこのように返されます。

22 節「イエスは言われた。『わたしは七回までとは言いません。七回を七十倍するまでです。』」

驚くべきことにイエス様は 7×70 で 490 回赦せと言うことではなく、数えられないほど赦しなさい、際限なく何度でも赦しなさいと言われました。人間にこんな赦し方が出来るのかと思わされますが、ここでイエス様が言いたいのは、赦しとは自分の努力で人から得られるもの、自分の努力で人に与えられるものではなく、神様から受け取る恵みによって、赦され、赦すもの、つまり赦しとは神様からの恵みなのだということです。この赦しが神様の恵みであることをイエス様は一つのたとえを用いて教えてください。

23 節

23 節「ですから、天の御国は、王である一人の人にたとえることができます。その人は自分の家来たちと清算をしたいと思った。」

天の御国は〇〇ですというたとは、マタイの中でも繰り返し語られていますが、この一連のたとえの特徴は、天国はこういうところですよ、という意味だけにとどまらず、この地上における天の御国、つまり神様のご支配がある場所では、このようなことが起こりますという神様からの宣言でもあります。

つまり、天の御国をすでに生きている者たち、すなわち天国人であるクリスチャンたちの間におこる、神の国での現実が語られているのです。その中で、イエス様は天の御国とは王である一人の人にたとえられると言います。この「王」とは、たとえの最後 35 節で、このたとえの種明かしがあるように天の父なる神様のことです。

また、「家来」とは父なる神様を信じている人のこと、つまりイエス様の弟子たちや当時のイスラエルの人たちのことを指すのでしょう。そして、「清算」とは最後の審判のことであると捉えることが出来ます。この父なる神様によるさばきの日がはじまりました。

24 節「清算が始まると、まず一万タラントの負債のある者が、王のところに連れて来られた。」

1 万タラントとは現代なら、数千億から一兆円くらいの金額のお金です。現代のお金持ちなら恐ろしいことに一兆円くらいであれば、何人か本当に自力で返せそうな世界のお金持ちの人がいますが、イエス様がここで言いたいのは、この負債、つまり借金とは人間の罪のことであり、人にはこの罪という名の借金を神様に対して自分の力で返すことが出来ないということです。人間がどれだけ自分では返せないほどの莫大な罪を神様の前に積み立てているのか、そのことをイエス様はここで教えておられるわけです。

そして「連れて来られた」とあるように、例え家来であっても、つまりクリスチャンであっても、人は誰でも、イエス様の再臨の時に、このように神様の前に連れて来られ、その罪に対しての責任が問われることになるのです。

25 節

25 節「彼は返済することができなかったので、その主君は彼に、自分自身も妻子も、持っている物もすべて売って返済するように命じた。」

当たり前のことですが、家来はこの莫大な借金を自分の力で返すことが出来ませんでした。人はだれしも罪という借金を神様に対して自力で返すことは出来ないのです。返したくても、返すことの出来ない、消すことの出来ない借金それが罪なのです。そのような家来に対して、主君は命令します。自分と妻と子ども、持っている物もすべて売って返済しなさいと。

このように、神様は罪を見過ごすお方ではありません。ご自分の義に従ってはっきりと罪のつぐないを人に求められます。しかし、人は自分を売っても、妻と子どもを売っても、持ち物すべてを売り払っても何を差し出しても、自分の罪という借金を返すことは出来ないのです。多くの人は自分の人生を自分でコントロール出来ると考えますが、それは罪の大きさを本当には理解していないからです。人は自分の罪と本当に向き合った時、その罪の大きさに絶望するしかないので。

26 節「それで、家来はひれ伏して主君を拝し、『もう少し待ってください。そうすればすべてをお返しします』と言った。」

家来はすべてを支配している主君にひれ伏して降参し、もう少しだけ時間をもらえるようにと言います。しかし、この家来はまだ自分の状況が良く分かっていません。なぜなら、何度も、何度も、ここまで確認してきたように、この罪という莫大な借金は人の力では返せないからです。

人は本能的に何とか自分で努力すれば神様に対して自分の力で罪を赦してもらえると内心思っているようです。しかし、それは自分の功績によって自分の救いを得ようとする、他の宗教と何ら変わらない考えです。けれども、主君は、そのような何も分かっていない家来を、かわいそうに思って彼を赦してやりました。

27 節

27 節「家来の主君はかわいそうに思って彼を赦し、負債を免除してやった」

この「かわいそう」という言葉は、ギリシャ語をみると特別な言葉で、はらわたがねじれるような、深いあわれみを示す言葉です。（ギリシャ語では $\sigma\pi\lambda\alpha\gamma\chi\nu i\zeta o\mu\alpha i$ ）イエス様もたびたび、群衆に対して、病人をいやされたとき、そして放蕩息子のたとえでも、この「かわいそう」という言葉を使って、神様のあわれみを表現しています。また、「赦し」という言葉も、実際には解放したと言う意味の言葉です。そして、「免除」という言葉も実際には手放すと言う意味の言葉です。ですから、主君はここで家来に対して、深いあわれみを示し、主君には何の落ち度もないのにその借金を手放し、借金に捕らわれている家来を借金から開放してくれたのです。

主人は「あなたが自分の借金を自分で返せないことは良く分かったからもういいよ。もう大丈夫だよ」とここので言ってくれたのです。ここに主イエス・キリストの福音があります。

同じように父なる神様も、罪の中で苦しみ、もがき、このままでは自分の罪の重さで死ぬしかない、このままでは到底生きることなどできない、私たちをあわれみ、ご自分のひとり子である、イエス様を罪の救いのために送ってくださいました。私たちはこのイエス様の十字架の死と復活によって、自分の罪という返すことの出来ない莫大な借金をその恵みによって帳消しにして頂いたのです。ですから、神様の赦しとは恵みなのです。赦しとは受けるに値しない者が一方的に受け取る恵みなのです。赦しは神の恵みなのです。しかし、私たちはその恵みを忘れやすい者であることをこのたとえは続けて語ります。

28 節

28 節「ところが、その家来が出て行くと、自分に百デナリの借りがある仲間の一人に出会った。彼はその人を捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。」

ところが、自分では決して返すことの出来ない大きな借金を、主君からの恵みによってなかったことにしてもらった家来は、赦してもらったその足で、すぐに自分が 100 デナリ、現代のお金ですと、大体 100 万円ほどのお金です。この 100 デナリを貸している仲間に出会うと、あろうことか、あわれみではなく、その仲間を捕まえ暴力をふるい、「お金を返せと」詰め寄ったのです。

確かに百デナリは安い金額ではありませんが、帳消しにしてもらった、1 万タラントとは比べ物にならないような小さな金額です。自分の罪は赦してもらうのに、仲間の罪は赦せない、人間の矛盾する姿がここにあります。人間の本性というのは対等な仲間に対して現れやすいのかもしれませんが。上位の存在である主君には「あわれみ」を求め、対等な関係である仲間には「厳しい正義」を求める、そして自分より下のものには「人間扱いすらない」、そのような人間の罪の姿をこのたとえは私たちに教えてくれます。

29 節「彼の仲間はひれ伏して、『もう少し待ってください。そうすればお返しします』と嘆願した。」

26 節の言葉と 29 節の言葉は、ほぼ同じ言葉です。多少の違いがあるのは主君に対する態度と仲間に対する態度、つまり言葉遣いの違いがあるだけです。心が和むようなたとえ話であれば、ここで家来はハッと、気が付いて、そう自分も主君に同じような言葉を書いて赦してもらったではないか、それなら私もこの仲間を赦そうとなりそうなものですが、あろうことか決して返せない借金を赦してもらった家来は、このように行動しました。

30 節「しかし彼は承知せず、その人を引いて行って、負債を返すまで牢に放り込んだ。」

ここまでこのたとえを読み進めてきた私たちも驚くような対応を家来は仲間に行います。この家来はもう少し待ってくれと、懇願する仲間に対して、自分も主君からあわれみを示されたのにも関わらず、そのあわれみを仲間を示すことなく容赦なく牢に投げ込んだのです。

牢に投げ込んでいったいどうやって借金を返すのでしょうか。家来は仲間をたださばきたったのでしょうか。自分が受けた赦しの恵みは家来の心になんの変化も、もたらさなかったのでしょうか。この家来は自分が与えられた赦しが恵みであったことを全く理解していなかったのです。

31 節

しかし、31 節「彼の仲間たちは事の成り行きを見て非常に心を痛め、行って一部始終を主君に話した。」

31 節では家来の仲間たちがこのあわれみのない行いを見て、非常に心を痛めたということがポイントです。本来であれば、怒るのではなく、このように心を痛め、あわれみを示すと言うのが、仲間に対する行動であるはずですが、天の御国を生きる者の生き方であるはずですが、また、仲間たちはこの描写だけを見ると告げ口したような恰好であります。主君が神様のことを表現しているのだとすれば、仲間たちはさばきを神様にゆだねたと考えることが出来ます。

それは、このたとえの前に記されていた箇所 15 節～17 節の文脈を見ると分かるように、兄弟の罪をただ赦し、見過ごすのではなく、罪を指摘し、兄弟を回復させるということも、天の御国を共に生きる仲間である、兄弟姉妹のつとめでもあったからです。では、さばきをゆだねられた主君は、どのようなさばきを下したのでしょうか。

32 節

32 節「そこで主君は彼を呼びつけて言った。『悪い家来だ。おまえが私に懇願したから、私はおまえの負債をすべて免除してやったのだ。』」

家来はいったん免れたはずのさばきの座に再び主君によって呼びつけられます。悪い家来というとなんだか、かわいく聞こえますが、実際には赦しの恵みを理解できない家来の心のゆがみ、ねじれ、邪悪さが現されている言葉です。そのような家来に主君はあらためて与えられた恵みを思い起こさせます。

33 節

33 節「私がおまえをあわれんでやったように、おまえも自分の仲間をあわれんでやるべきではなかったのか。」

家来はその主君に腹のそこからあわれまれたように、その恵みを当然仲間にも返してやるべきでした。まさに、「私たちの負い目をお赦しください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦しました。」と、今日も共に祈った主の祈りにあるように、神様に赦された者として、自分もまた仲間を赦すという、当たり前のことがここでは告げられているのです。つまり、主君の怒りは、借金を返せないことへの怒りではなく、あわれみによる赦しの恵みを受けたにもかかわらず、その赦しの恵みを自分は仲間に現わそうとしない、仲間への憐れみのなさへの怒りだったのです。

34 節

34 節「こうして、主君は怒って、負債をすべて返すまで彼を獄吏たちに引き渡した。」

主君は家来が赦しの恵みを全く理解しなかったことに怒りました。この怒りは、感情のままに怒る怒りではなく、義憤のような怒りです。赦しという恵みを受け取っていないながら、その恵みによる変化が、家来には全く現わされていないことに主君は怒ったのです。

また、「獄吏」とは当時存在した借金の取り立て屋のことです。彼らは拷問や圧迫によって借金を返済者から取り立てました。しかし、家来の借金は返すことの出来ない金額でした。返したいのに返せないという負の無限ループに家来はここで陥るのです。ここから分かるのは、非常に恐ろしいことですが、自分は神様に赦されたのに、仲間を赦さない者は、再び神様のさばきの下に戻るということです。

なぜなら、その人は本当には神様の赦しを受け取っていないからです。自分では解決できなかった莫大な罪を、恵みによって赦されたことを理解していないのです。ですから仲間を赦せないのです。本当に神様の赦しの恵みを受けた者は、自分も赦されたように、仲間も赦すという生き方に変わるはずなのです。そして、最後にイエス様はこのたとえの種明かしをされます。

35 節

35 節「あなたがたもそれぞれ自分の兄弟を心から赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに、このようになさるのです。」

冒頭言いましたように、主君とは天の父なる神様のこと、家来とは弟子たちのこと、つまり、天の御国をすでに生きている、天国に故郷のある、天国人である私たちのことです。

ですから、たとえの家来のように、私たちも自分の兄弟姉妹を心から赦さないなら、天の父も最後の審判の時に、私たちを同じように赦しては下さらないのです。

そして、何度も言いますが、これは天の御国のたとえですから、この聖書箇所が伝えたいのは、仲間を赦さない者は、神様からも赦されないという単純なことだけではなく、神様の恵みによって赦された者は、その恵みによって仲間を赦す者となるという、天の御国の住人の生き方を示しているのです。

むさぼりを捨て、プライドを捨て、神様から与えられた、主イエス・キリストの十字架の赦しという恵みに従って、同じクリスチャンを、そして、この世のすべての人が自分に対して行った不義を、悪を赦せるかどうか、それが、自分自身が天の御国を生きているかどうかの一つのしるしなのだとすることをこのたとえは私たちに教えてくれているのです。

まとめ

旧約聖書のイスラエルの民たちは、このたとえの家来のように、出エジプトという大きな恵みを神様から受けたにも関わらず、安息年、そしてヨベルの年という自分の仲間、兄弟姉妹に自由を与える恵みの年を実行しませんでした。彼らは自分の仲間を赦さず、また神の恵みをむさぼってきたのです。

では、私たちはどうでしょうか。私たちの中にも仲間を赦せない、同じクリスチャンを赦せないという思いがないでしょうか。私自身はと言いますと、ここ4年程赦せないクリスチャンがいました。どうして赦せなかったのか、内容は伏せさせて頂きたいと思いますが、どうしても赦せない人がいました。

しかし、どうしても赦せない、そういう思いを抱えていると、人はどうなると思いますか。毎日ずっとそのことがちらついて、いつも心が晴れず苦しいんですね。寝る前やふとした瞬間に思い出しては、腹の底から怒りがふつふつと湧き上がってくるのです。夢に出てくることもありました。ダビデのように神様が復讐して下さるように祈ることもありました。

でも、何も解決はしませんでした。しかし、ある時気づかされました。「ああ、自分にも悪いところがあったな、自分にも落ち度があったな」そして何よりも自分はイエス様の十字架で赦されておきながら、人を赦せない自分の罪の深刻さに気づかされたのです。

その時からです。「その仲間を赦せるようにして下さい」と神様にお祈りできるようになったのは、いまでもすべてを赦せたなどとは思っていません。しかし、もう思い出して怒ることはなくなりました。

なぜなら、仲間を赦せなかった私の心を神様が自由にして下さったからです。仲間を赦せなかった私の罪をイエス様の十字架の贖いが、私をきよめ、私を赦してくれたからです。その時、仲間を赦せなかった重く苦しい私の心を聖霊のさわやかな風が通り抜けていきました。神の霊がわたしの心を癒し回復して下さいたのです。

今分かち合った苦しみからも分かるように、仲間を赦せないということは、自分自身のことを、罪と苦しみの中に閉じ込めることになります。そして、この人を赦さないということは、突き詰めるとイエス様の十字架の赦しを自分でなかったことにしてしまう、自分がイエス様の赦しをその生き方で否定している、という非常に愚かなことなのです。

しかし、私のような愚か者たちのために、イエス様は旧約の時代になされなかった、全ての人を罪から解放し自由にする、永遠のヨベルの年の実現をすでに宣言して下さいました。**ルカの福音書 4 章 16 節～21 節にこの宣言が記されています。**ここはイエス様が故郷のナザレで安息日に聖書を開いて語られたイエス様の説教であり預言の成就である箇所です。お読みいたします。

「それからイエスはご自分が育ったナザレに行き、いつもしているとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとして立たれた。すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その巻物を開いて、こう書いてある箇所に目を留められた。『主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、目の見えない人には目の開かれることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、主の恵みの年を告げるために。』イエスは巻物を巻き、係りの者に渡して座られた。会堂にいた皆の目はイエスに注がれていた。イエスは人々に向かって話し始められた。『あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。』」

イエス様が読まれたイザヤ書 61 章は、「解放」「自由」「恵み」とヨベルの年を思わせる言葉を用いて、終末における神の救いを預言していると考えられている箇所です。つまり、イエス様はここで、50 年に一度ではなく、永遠のヨベルの年が、永遠の自由と開放がイエス様によってはじまったと宣言されたのです。

イエス様がたとえの中で語られた、借金の帳消しが、罪の赦しが、イエス様を信じることによって、恵みによって、この日、この時からもうすでに実現されはじめていたのです。そして、この永遠のヨベルの年は、イエス様の十字架と復活によって完成しました。全ての人の罪がこのイエス様の十字架と復活を信じるなら赦される時代がやって来たのです。

私たちの中にまだ自分の仲間を赦せない人はいませんか。もしそのような人がおられましたら、私は最後にこう伝えたいと思います。

永遠のヨベルの年、全ての人の罪がイエス様の十字架と復活を信じるなら赦される恵みの年はすでに私たちの中に来ています。

そうであるならば、いつまであなたは、自分の仲間を赦さないのですか、いつまであなたは自分の罪に捕らわれているのですか、いつまであなたは主の十字架の赦し、その恵みを受け取らないままにするのですか。主の恵みの年はもう来ています。あとはイエス様があなたを赦して下さったように、自分の仲間を心から赦し、その赦しの恵みを全ての人へと広げていくだけではないですか。

主イエス・キリストの赦しがある所、そこには人の心を癒し回復する、聖い御霊の風が吹いています。この御霊の風を受けながら、あなたも共にイエス様の赦しの恵みを証しする生き方に励んでまいろうではありませんか。

お祈り

『主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、目の見えない人には目の開かれることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、主の恵みの年を告げるために。』

恵みあふれる天の父なる神様。今日は永遠のヨベルの年、イエス様の十字架による、恵みと赦しの時代がもうすでに私たちのただ中に来ていることを共に確認いたしました。

私たちの内におられる聖霊様、私たちの心の中に、まだ自分自身を罪に閉じ込める、仲間を赦せない気持ちがありましたら、そのささやきをもってお知らせください。

私たちと共におられるイエス様、罪に捕らわれている私たちの心を開放し自由にして下さい。

あわれみ深い天のお父様、私たちを天の御国の住民に相応しく、主イエス・キリストの赦しの恵みをこの世界に現わしていく者としてください。

このお祈りを愛する神のひとり子、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。